

創造と挑戦

岡山理科大50年

岡山市街地を望む半田山の中腹。岡山理科大（同市北区理大町）の正門をくぐると、キャンパス内の一等地で大規模な建設工事が行われている。

地下1階、地上11階（延べ床面積約2万7千平方メートル）の「新1号館」。総工費83億円を掛け、2016年3月の完成を目指して進む工事は、創立50周年記念の一大プロジェクトだ。

建物内の設備も充実している。学生同士のディスカッションや自学・自習の場となる多目的スペースの拡充、参加型の講義を意識した講義室群、研究室や専門的な実験室、語学自習などができるシステムの導入と、文系に比べて学内の滞在が長くなりがちな理系学生たちの「満足度向上」と「積極的な学び」の実現を狙う。

新1号館建設は、そういった大学の強い意識の表れとも言える。

岡山理科大は今年、教育改革を本格的に始動した。高い専門性だけでなく、豊かな人間性を備えた人材の輩出を掲げ、

⑦ 人をつくる

共通教育（基礎教育）に初めてメスを入れ、講義中心からディスカッションや学外でのフィールドワークを取り入れた新しい授業の在り方を模索している。

改革の中心として活動するのが、10

年に組織化された教育開発支援機構。学習支援、理科教育など6センターと2室で構成された「人づくり」を担う中枢だ。

そのうちの1つ、科学ボランティアセンターが主催したイベントが29日に

改革進め発展続ける

岡山市であった。

学生4人が講師となり、小学生ら約

20人に静電気を発生させる実験などを行った。理科教員を目指す理学部2年垣坂達行さん（20）は「子どもたちの前で話す貴重な機会。これからも科学って楽しいと思ってもらえるように教えたい」と意気込む。

狙うのは、こういった場で経験を積

んだ後、各分野のリーダーとして社会貢献できる人材育成。「単なる学力だけでなく、自ら考え、積極的に活動する『考動できる』学生を育てたい」と、教育開発支援機構共通教育連携室長の森嘉久理学部教授（49）は力説する。

08年度に動物と人間との共存の在り方について教える「動物学科」を理学

を目標に教育学部の開設準備も進める。

時代の流れを読み、社会のニーズに応える姿勢は、学生の心を捉えている。18歳人口が減少する少子化時代において、入学志願者は5年連続で増加。景気低迷の影響から地元志向が強まっているとされるが、入学者の7割は岡山県外出身者だ。

「他にはない独自の学問分野の充実など大学に魅力さえあれば、学生は全国から集まってくる」。波田善夫学長は確かな手応えを口にする。

人づくりへの決意は、50周年記念のロゴマークの中にも刻まれていた。「その先を解き明かす人に」。新しい一歩が始まる。

伊丹友香が担当しました。



静電気をテーマにした実験を披露する岡山理科大生＝29日、岡山市